

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセのゆかりの地を訪ねて VII ーワイマール時代のトーマス・マンー

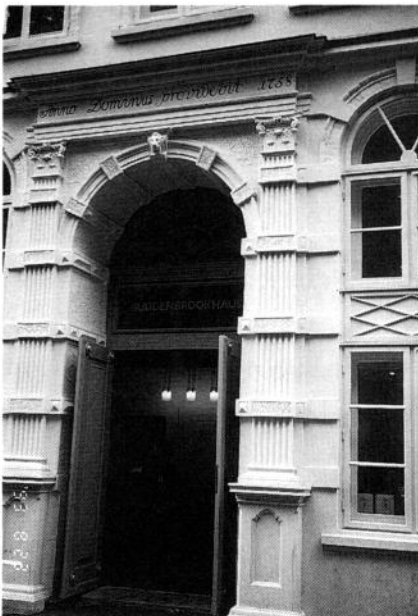
田 中 博

1) はじめにかえて

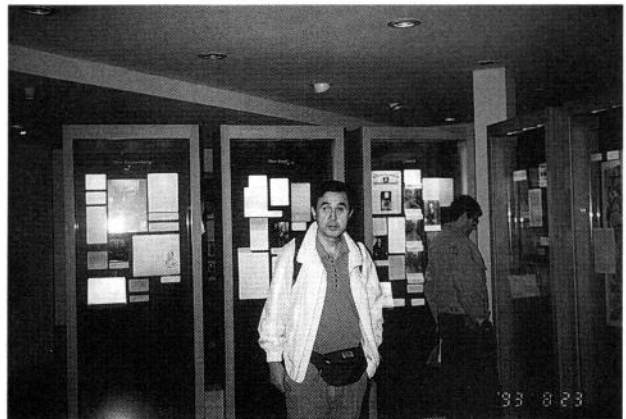
1993年8月19日からのドイツ・スイスの2週間の旅の目的は、主として2つあった。1. は、この年の5月6日に、リューベック市メング通り4番地にある、通称、“Buddenbrookhaus”と呼ばれている建物がリューベック市に買いもどされて、(1977年8月に、はじめてリューベック市を訪ねた時は、この建物は、銀行として使用されていた。) Heinrich-und Thomas-Mann-Zentrums という名の博物館として開館したと知ったので、それを確認し、トーマス・マン研究の資料を収集すること。2. は、トーマス・マンの『魔の山』の舞台となった、スイスのダボス村にある Waldhotel-Bellevue を訪ねて、その小説の舞台を目にすることにあった。

ブッデンブロークハウスの訪問者への案内書は、簡潔にその歴史を書きとめているので、引用しておくことにしよう。

「1758年にヨーハン・クロール氏によって建てられたこの建物が1841年にハインリッヒとトーマ



〈新装なったブッデンブロークハウス〉



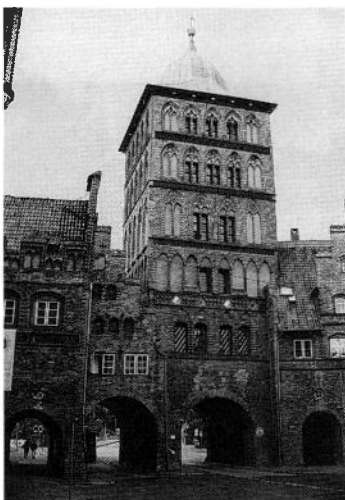
〈館内の展示物〉

ス・マンの祖父のヨーハン・ジークムント・マンによって買収された。そして、1891年までマン商会の所在地であった。この祖父母の家で、彼等は青春時代の多くの時間をすごした。この建物の名はトーマス・マンのノーベル賞受賞作品『ブッデングローク』によって受けたものだった。長編小説：ブッデングロークの歴史は、マン一族の歴史と多くの関連をもっていて、メング通り4番地のこの地が、舞台であった。1942年の3月28日の深夜から翌29日にかけて、この歴史的古都リュベックの町は3分の1以上が爆撃によって破壊された。幸いにも正面と元からの丸天井のある地下室が残った。その他の建物は完全に全滅した。ある銀行が1957年にその破壊された建物を買入れ、そしてその古い正面を使って建物を再建した。1991年にハンザ都市、リュベック市がその建物を買ひもどし、それをハインリッヒとトーマス・マンのセンター：博物館として改築した。」……(1)

リュベック市では、1986年から Internationales Thomas Mann Kolloquium 国際トーマス・マンセミナーが開催され始めて、チュリッヒ工科大学付属のトーマス・マン研究所と共に、トーマス・マン研究のセンターとしての役割も、この博物館は関わりをもっていくものと期待されている。もち論、従来からの観光客の名所としての役割りは旧の銀行当時からあったが、それにも増して、私の訪ねた1993年8月も、多数の来館者が見られた。リュベック市市役所、マリーエン教会のすぐそばと、大変めざましたロケーションにあることも、大いに観客をあつめる役割りをはたしている。

「…トーニは、急いで手まわりのものをいそいそとまとめ、七月終わりのある日、一緒に行ってくれるトムと連れ立って、クレーガ一家の豪華な馬車にのりこみ、みんなに上機嫌でさよならを言い、ブルクトールの門から、ほっとした思いでトラーヴェミュンデに向った。」……(2)

1230年頃に建てられたと云われている、旧市街の北の出入口のブルク門も、修復されて今も建っている。今にもトーニの乗った馬車が、門の向うからあらわれるような不思議な錯覚をおぼえる。



〈ブルク門・リュベック〉

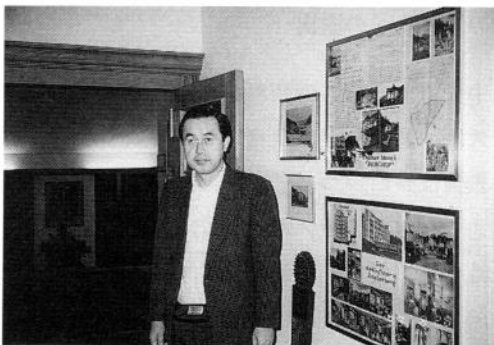
1993年はリュベック市のハンザ都市850年祭でもあったのである。なお、トーマス・マンは1926年にリュベック市700年祭を記念して、『精神生活の形式としてのリュベック』と題して講演を行なっている。マンのこの講演の中でとりあげられている、リュベック市名物のニーダーエッガーの店のマルチ・パンも、今も市役所の近くにあつて、にぎわっている。

「一人の単純な青年が、夏の盛りに、故郷ハンブルクを発つて、グラウビュンデン州ダヴォス・プラッツへ向った。…ハンブルクからダヴォスまでといえば、それははるかな遠い旅

である。大体三週間などという短い滞在期間の割には遠すぎる。いくつかの国々を通り、山を登りくだりして、南ドイツの高原からボーデン湖の岸へ降りる。……スイス領ロルシャハの町でまた汽車に乗るのだが、それさえもアルプスの小駅ラントクヴァルト止りで、そこでまた汽車を乗り換えなければならない。……8時近かったが、まだ日は暮れていなかった。遠景に湖が一つ現われた。水は灰色、岸に沿ってエゾ松の森が黒々と周囲の山へはいあがり、それがずっと上の方でまばらになり、やがて消えて、それから上は霧のかかった剥きだしの岩になっていた。小さな駅に停車した。窓外の呼び声を聞くと、ダヴォス村の駅だった。もう少しで着くのだ、とハンス・カストルプは思った。するとだしぬけに、耳元で、いとこのヨーアヒム・ツィームゼンの「やあ、来たね、さあ降りろよ」と云うのんびりしたハンブルク訛の声を聞いた。……「さあ、出てこいよ、ぐずぐずしないで」「でも、まだ着いたんじゃないだろう」とハンス・カストルプはきょとんしたと様子で、腰をかけたまま言った。「いや、着いたんだ。これがダヴォス村の駅だ。サナトリウムへはここからのほうが近いんだ。馬車をもってきた。まあ、その荷物をこっちへよこしたまえ。」…(3)

これは、『魔の山』の出だし、主人公ハンス・カストルプがダボス・ドルフ駅に到着するシーンを引用したものである。1993年8月26日ドイツ・ハイデルベルクを朝たって、バーゼル、チューリッヒそして小説の中にあるラントクヴァルト駅で乗りかえて、ダボス・ドルフ駅へ私達も降り立った。『魔の山』では、森のサナトリウム＝ベルクホーフへは馬車で主人公はむかえられたが、私達は、ホテル、ベルビューの小型バスの出むかえを受けて、丘の中腹のホテルについた。受付のそばには、このホテルが、トーマス・マンの『魔の山』のベルクホーフであることの説明の写真が多数はり付けてあり、それはこのホテルの名誉であるのだろう。

翌日は、ダボス・プラッツからフィリズールで乗り換えて、サン・モリッツに出ました。サン・モリッツは1932年にトーマス・マンとヘルマン・ヘッセの出会いの場がある。Chantarel チャンタレラのスキー場があり、もう一つは、二人の作家に、大きな影響を与えた、フリードリッヒ・ニーチェの夏の家が、今も、オーバー・エンガディンの谷間の村、シルス・マリア Sils-Maria に、Nietzsche-Haus として保存されて残っている。早速、サン・モリッツの駅前から、ポスト・バス



〈ホテル ベルビュー・ダボス〉





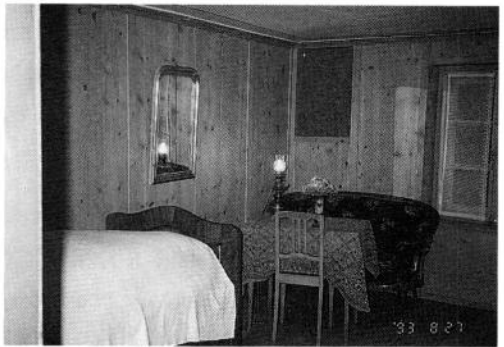
〈ニーチェ・ハウス正面〉



〈1881年-1888年夏をフリードリッヒ・ニーチェが住む〉



〈ニーチェ資料の掲示版〉



〈ニーチェの居室〉

にゆられてシルス・マリアに出かけた。途中から雨が降り始め、シルス・マリアの広場でバスを降りる頃には、雨は本降りとなる。しかし、ニーチェ、記念館は3時からしか開かない。ここで、ニーチェは、1881年から1888年まで夏になるとここを訪ずれて、かの有名な『ツァラトゥストラはこう語った』を書いたとつたえられている。グボスのベルクホーフの舞台になったホテル・ベルビューに、マンとヘッセの写真があったが、ここにも有名な、マンを真中にヘッセとパッサーマンの写真がこの記念館の中にもかげられていた。また、ヘルマン・ヘッセは、ここシルス、マリアの丘の上の有名なホテル・バアルトハウスに、晩年夏の避暑におとずれていた。

2) 共和国崩壊——マンのスイスへの脱出

……ミュンヘンは敗れた、統制された。私たちは中央駅でスイスの列車から降りるとすぐに、それを感じた。その匂いをかいだ。家の運転手ハンスは、いつもどおり家用のピュイックで駅前広場に私たちを迎えにきていた。だが彼の態度、表情は妙にいつもとちがっていた。……声も震えているのだ。「どうか用心して下さい」と彼は震えながらささやいた。「おふたりとも。でも、特にエーリカお嬢様は。あなた方はねらわれているんです。褐色党の連中なんです。……」……忠実なハンスがあの日なぜあんなにもびくびくし、どこからあれだけのことを知ったのかは、私たちはあとになって初めて知った。彼は二重に良心のやましさを感ずる二重の裏切者だったのだ。

ポシंगाー通りでの、ミュンヘンでの、ドイツでの、最後の数時間は、不安と身のけずられるようなあわただしさにみちた時だった。裏切者ではあるが、やっぱり憐みぶかい運転手の警告を忘れず、私たちは部屋にとじこもっていた。……だが電話は通じていた。そこで私たちはまずとりあえず、魔法使とミーラインが講演旅行の疲れを癒しているアローザ（スイス・アルプス山中の小都市）に通話を申し込んだ。ブリュッセル、アムステルダム、パリ、その他の都市で父は『リヒアルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』について講演し、ひき続いて予定どおりスイス山中に逗留して休暇をすごしていたのだ。今彼はやはり予定どおりに帰ってこようとしていた。私たちはこの予定を思いとどまらせるのが至当だと思った。……私たちの電話が盗聴されているかもしれない、いや、大いにありそうなことだったのだ。したがって政治情勢に直接触れることは避けて、天気のことを話した。……やはり父はどうとも感じないようだ。強情で、わかりそうになかった。……遂に私はそれをはっきりといった。やけになって、ありのままを。「スイスにいて下さい。こっちへきては安全じゃないんです。」それで父は納得した。……「あたしはスーツケース一つしかもっていかないわ」エーリカはきっぱりといった。私も必要最小限のものだけを詰めた。……エーリカは到着したその日の晩のうちにスイスへ戻っていった。驚いている両親にそこで落ち合うつもりだったのだ。私は二十四時間後、パリへむかった。……私は1933年3月13日、ドイツを捨てた。……(4)この引用は、クラウス・マン『転回点——ある生涯の報告』(Klaus Mann: Der Wendepunkt —Ein Lebensbericht) 1950 Fischer Verlag であり、トーマス・マンが、心ならずもドイツに帰ることが出来なくなった1933年3月の状況を一番良く伝えるものである。この記述から私は、『トーマス・マン全集』別巻(新潮社版)^(註)のトーマス・マン年譜——1933年3月12日 エーリカとクラウス・マン、もう一度国外からミュンヘンへ戻り、両親に電話でドイツは「悪天候」と警告する。エーリカはすぐ戻り、クラウスは3月13日にドイツを離れて、パリへ向う。——(5)このエーリカとクラウスがミュンヘンに舞戻った日を3月12日とっていたし、又、多くのトーマス・マン研究書にもこの日付がつけられているので、それを信じていたが、最近入手した本の次の記述で、少し疑念をもちはじめた。それで、この原文を少し引用しておきたい。トーマス・マン研究に重大な点とはいいがたいけれど。

10.III.—□ München (abends). Abreise. Mit Annemarie bis Chur im Lenzwagen ; schöne Fahrt. Zug beinahe versäumt. —In St. Margarethen: Zeitungen. Die münchener Ereignisse, Epp u.s.w. Wachsende Nervosität. … —Die Ankunft in München. Chauffeur Hänschen nervös. Bei Offi und Ofei vorbeigefahren. Von hier mit Arosa telephonierte.

……

13.III.— E's Abreise (Arosa.)Keine Antwort von Breitbach. Aber wohl doch nach Paris. … —Jetzt leider halt packen ; fahre nicht gerne weg ; Einsamkeitsgefühl.——Zur Bahn. Stüskind, der Elvensböcks brachte. Mit diesen halbes Stündchen in ihrem Abteil (z.B.über

Pamela.) —Im Schlafwagen mit ganz sympathischem Amerikaner.

14.III.—Paris, Hôtel Jacob. □ Ankunft Gare de l'Est. Im Bahnhofsrestaurant gegessen. BONZO. Mit ihm hierher. Ganz nettes Zimmer mit Bad, IV.Stock ; Monatspreis. An E telegraphiert ; Brief an münchener Bahnhof (Brille im Schlafwagen vergessen.) … □ (6)

この日記を読むかぎりでは、ミュンヘンに到着したのは3月10日であり、アローザ(トーマス・マンとカーチャ夫人が滞在していたスイスの町の名)に電話をしたとの記述があるので、前述のクラウス・マンの『転回点』の電話による父、トーマス・マンへの電話と考えられる。又、この日記の3月10日、3月11日、3月12日の記述に、エリカ、マンが、アローザへの出発の記述はみられない。引用したクラウス・マンの日記の3月13日の記述は前述の通り、E's Abreise (Arosa.) 以外に認められない。そしてその夜、クラウス自身はパリにむけて、夜行列車の客となったこと、3月14日にパリ、東駅に着いたとの記述がみとめられる。『転回点』をクラウスが書いた時点(1994年秋)で、若干の記憶ちがいが、みとめられるともとれる。また、トーマス・マン自身の日記——1918年9月1日から1921年12月1日までのものと1933年3月15日から1955年7月29日までのものが死後残されていた。ただしマン自身によって1975年8月12日までは開封禁止されていたものである。——1933年3月15日の日記は、その当時のことを一番知ることの出来る資料と思われるし、追加資料としては同年3月13日付の手紙が残っているのでそれを引用しておこうと思う。

33年3月15日 水曜日

昨夜は、ニーキシュ夫妻に教えてもらった副作用のないカルシウム剤のおかげで、意外なほどぐっすり眠れた。このところずっとそうしている通り、ベッドで朝食を摂ったあと、『ヴァーグナー』エッセイのなかでのナショナリズムについての発言のうち、検閲に触れそうな部分を削除する件で、ズールカンプ宛て、そそくさと数行したため?。…… 一昨晚いらいエーリカが来ているが、いまのような時に、長女と末娘という、私のお気に入りの二人の子供が身近にいてくれるのは、決して偶然ではなく、私のこれまでの人生につきまといて来たあの「幸運」の一つと呼んでいいだろう。エーリカが到着し、ミュンヘンでの馬鹿げた事件やおぞましい出来事、逮捕、虐待その他いろいろの話をしてくれたことは、私たちの興奮と嫌悪感をいっそう騒ぎ立て立たし、私たち家族のうち眼を付けられている人間はもう誰も帰って来ないというミュンヘンからの警告は、シャルナーゲルおよびレーヴェンシュタインの手紙いらい、ますます切実な響きを帯びるようになっていく。……(7)

上記の下線部の原文は次のようである。 Seit vorgestern Abend ist Erika bei uns,…(8)トー

マス・マンの日記は3月15日なのだから、エーリカが、アローザのホテルに来たのは、13日の夜ということだろう。ミュンヘンから、ドイツとスイスのボーデ湖沿いのSt. Margrethen——前述のクラウス・マンの3月10日付の日記にある、クール（スイスの小都市、アローザの入口の町）からザンクト・マルグレッテェン経由ミュンヘンの逆の道でもどっただろうと思われる。そうすれば3月13日にエーリカがミュンヘンを出発し、その晩にアローザへ帰り着くことは可能であるので、クラウス・マンの日記の記述の方が正しいと推測される。マン一家にとって、1933年3月13日はその後の運命に重大な影響を与えた日の一つとしてまさに、クラウスのいう転回点の重要な日付と云えよう。

154 ラヴィーニア・マッケッティ宛て

アローザ，1933年3月13日

ノイエス・ヴァルトホテル

今月3日付のお手紙まことに有難うございました。暖かいお言葉をいただき、大いに慰められました。と言いますのも、本当に気が重く、恐怖と嫌悪に非常に悩まされているからです。

あなたがこの手紙を書かれたのは、まだ比較的前途に希望がある頃でした。いちばん不幸な事態^{しゅつたい}が出来したのはそれ以後のことで、私ならびに私の家族が将来どうなるか、まったく予測がつきません。私がいまドイツ国外にいるのは、まったくの偶然にすぎないのです。二月十日、私は、ヴァーグナー祭に出席すべく、家内をつれてミュンヘンをたち、そこからさらに、予定どおりブリュッセルとパリへ向いました。この講演旅行には社交上の行事もいろいろ付随していましたし、出発前の仕事で疲れてもいましたので、パリから、一、二週間の予定で当地へ静養に来ようということになったのです。メーデーも、スキーをしたいと言ってわれわれに合流しました。

ところが、静養の計画はつぶれ、むしろ静養とは正反対の結果になってしまいました。好んでしていることではありませんが、当地での滞在はどんどん延びてゆきます。われわれはバイエルンに期待をかけ、カトリック民衆党が強いバイエルンでなら、いずれにせよ万事はまず現状維持に終るのではないかと思っていました。選りに選ってバイエルンでも事実ああいう選挙結果になろうなどは、どんな専門家でも夢想だにしなかったところとっていいでしょう。……

そういうわけで、われわれは、否も応もなく当地での滞在を延期しました。事実、ドイツ全土で個人的テロ行為が続いている限り——そして、当局者としても、あれだけいろいろなことを約束してしまったのですから、ある程度までは部下連中のテロ行為を黙認せざるを得ないのでしょ——帰国するのは馬鹿気たことと思います。なぜなら、こんど政権の座についた連中の御用新聞は、私にたいする民衆の憎悪を口を極めて騒ぎ立ててきましたし、私の名前は、「常軌を逸した平和主義」や「祖国への精神的裏切り」の罪を犯した者の一人としてリスト・アップされているのですから。…… (9)

1914年8月1日に勃発した、第一次世界大戦時に於ては、『非政治的人間の省察』を書いて、西欧文明の政治的デモクラシーを受け入れる余地のないドイツの立場に立つトーマス・マン；ただし、ここで云われるデモクラシーは、今日の意味のデモクラシー：民主主義ではなく、マンの理念の中にあるのは、19世紀末の保守的リューベック上流市民たちが、進歩主義的伝統破壊行為を見る眼が深く影響しているものである。その同じマンが、1933年には、その政治的な時流のために、心ならずも、亡命生活に追いやられるという時代背景をいまだ少し逆のぼってみておかないとここに引用した、1933年3月13日の意味は理解出来ないであろう。ワイマール共和国の崩壊と基を一つにする、マンの運命は、同時に共和国の成立とその後の彼の政治及び時代理解の両方を振り返って見ておく必要がある。又、共和国の終り、ナチスの政権獲得の歴史的必然性は、すでに、共和国政権樹立のその中にあるという歴史観を基本にして、次のように見る事が出来るのではないかと思う。

1918年11月9日 ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世—オランダへ亡命

11月革命（11月4日 キール市キール労兵協議会〈レーテ〉→ドイツ各地へ波及）

11月9日ベルリン大衆蜂起—スパルタクス団

10日ベルリン^{レニテ}労兵協議会大会

社会民主党のシャイデマンがドイツ共和国成立を宣言。社会民主党（エーベルト）も参加。→指導権確立。社会民主党エーベルトと帝政軍部を代表するグレーナ将軍の間に密約→レーテによる急進化阻止（ドイツ革命の悲劇的な経過の原因となる）→反革命義勇軍がエーベルトとノスケの同意を受けて先鋭的労働者を流血弾圧する。

11月11日 中央党エルツベルガーが休戦委員長として、フランス・コンピユーニュの休戦条約を受諾（ヒンデンブルクのような軍の指導者が休戦委員長にならず、一政治家にさせたことは敗戦の責任を不明確にした。ルーデンドルフ将軍はスウェーデンに亡命・1919年2月には安々とドイツに舞戻っている。）

1914年6月28日 ヴェルサイユ条約の調印。

8月11日 ワイマール憲法が発効。

1920年3月13日カップ—揆（右翼クーデタ）

6月6日第一回共和国議会選挙で、ワイマール連合（社会民主党・中央党・民主党）は絶対多数を割る。「共和主義者なき共和国」といえる。

1921年8月26日 エルツベルガー暗殺

1922年4月16日 ラパロ条約を結ぶ。（対ソ連）

6月24日外相ラーテナウ（ユダヤ人）右翼青年に暗殺される。

- 10月15日 ベルリンのベートベン・ホールで『ドイツ共和国について』の講演をトーマス・マンは講演。共和国側に立つことを明確にする。
- 1923年11月8日 ミュンヘン市の酒場「ビュルガー・プロイケラー」でのミュンヘン一揆は失敗に終る。(ルーデンドルフ将軍も参加) 2日後、ヒットラー逮捕される。
- 1923年——経済はインフレの進行がけんちょになる。11月15日レンテ・マルク導入：インフレ収束。
- 1924年8月29日「ドーズ案」がロンドン会議で承認される。→ドーズ案成立後、ドイツにアメリカ資本が流入。以後ドイツ経済の安定化——「黄金の20年代」と呼ばれる時代に入る。
- 1924年12月 ヒットラー出獄を許される。
- 1925年2月27日 ミュンヘンの「ビュルガー・プロイケラー」で再建党大会。ヒットラー党主となる。
- 1925年2月28日 大統領エーベルト死去
- 4月26日 ヒンデンブルクが大統領に当選(大戦中の参謀総長の当選は共和国の歴史に重大な意味をもった。)
- 12月1日 ロカルノ条約締結
- 1926年9月10日 ドイツ、国際連盟に加入
- 1928年6月28日 社会民主党ヘルマン＝ミュラーの「大連立」政府成立
- 1929年10月2日 シュトレーゼマン外相死去
- ニューヨーク株式大暴落 アメリカ資本流出→ドイツ不況へ
- 1929年12月10日 ストックホルムにて、トーマス・マンのノーベル文学賞授与式が行なわれた。
- 1930年1月 ヤング案採決
- 3月27日 ミュラー内閣退陣——大連立内閣の終り——ドイツ破局の第一歩
- 3月28日 プリュエニング内閣成立
- 9月14日 総選挙、ナチス党(ヒットラー)進出
- 10月17日 ベルリンのベートベン・ホールで『理性に訴える』トーマス・マン講演
ルーノ、ワルタ夫妻に助けられ、ホールを脱出。
- 1932年4月10日 ヒンデンブルク大統領再選出
- 6月1日 パーベン内閣成立
- 7月20日 パーベン・クーデター：プロイセン内閣を罷免——社会民主党・労働組合、共産党は統一線戦組めず、ナチス・ヒットラー進出の最後の抵抗を見送る。
- 12月3日 シュライヤー内閣成立
- 1933年1月30日 ヒンデンブルク大統領ヒットラーを首相に認命

- 2月10日 ミュンヘン大学で『リヒャルト・ワーグナーの苦悩と偉大さ』トーマス・マン講演
- 3月5日 総選挙, ナチ過半数を獲得
- 3月9日 ヒットラーの命を受け, バイエルンのヘルト政権を打倒, フリンツ・リッター・フォン・エップが, ミュンヘンにナチ政権を樹立
- 3月23日 全権委任法ヒットラーの擬似合法的独裁成立
- 10月14日 国際連盟及び軍縮会議を脱退

3) 共和国時代の二つの政治的講演

ワイマール時代の初まりからその崩壊への歴史的な流れを, 上記の簡単な年代史をふりかえてみたが, その中で, トーマス・マンは, 1922年10月15日と1930年10月17日に, ベルリンのペーテンホールで, 代表的な政治講演を行っている。それは, 彼の時代に対する鋭い批判ということがかたずけるには, 余りにも鋭い時代理解であると今でも云えるほど, 見事に政治を見抜いている。そしてまた, この二つの政治論は, かの『非政治的考察』を第一次大戦中に書いた同じ作家マンが, 不幸な舟出をしたワイマール共和国時代に, その政治的危機の中で, 成長して民主主義者となり, ナチズムと対決する作家となって行く姿をこの二つの政治講演に見ることが出来る。そしてその結果として当然にむかえる, 1933年3月のマンのありようは, 必然と理解出来るのである。

それでは, すでに前回の私の小論『トーマス・マンとヘルマン・ヘッセのゆかりの地を訪ねて——デミアンと魔の山の間—— VI』でトーマス・マンの転向の説明資料として簡単にふれた, 『ドイツ共和国』について, もう少しその内容から, 当時の政治情勢と彼の考えについてふりかえておきたいと思う。

……過去の華麗はいかにすれば回復できるか, その方途をいささかも示さず, 蝟集して守護している主な玉座のために, ただ一人の帝位継承者も示せないのに, この国の現下の外的内的悲惨を, 破産させられた帝政の讚美に利用するのが露骨なごまかしでないとすれば, 煽動とは何かと云いたくなるからです。…

……つい先ごろまで私たちの上に君臨していた勢力は, 歴史によって聖化され, 世襲の栄光の魔力という非常に押しつけがましい権威を備えていたので, ……この勢力を存続させ, そのなすがままに任せるのが人間的な態度でした。……

運命があゝの勢力を除去し, あゝの勢力はもはや私たちの上になく, 起ったあらゆる事態から判断すれば, 二度と再び私たちの上に立つことはないでしょう。そして国家は, 私たちが好むと好まざるとにかかわりなく, ——私たちのものになりました。国家は私たち個々人の手に委ねられ, 私たちがうまく処理しなければならぬ問題になりました。そしてこれこそが共和国であり,

——共和国とはこれ以上のものではありません。……(10)

マンは、1918年11月のドイツ共和国の成立とその歴史の中での帝国政権の無責任な終戦のあり方について、正しく理解し、共和国の側に立つことをすでに正しい選択であるとした確信が、ここにも見える。参考にしてもらう為に、共和国時代の年譜をすでに引用しましたが、それをもう一度確認してもらおうと、もっとマンのこの演説を理解してもらえと思う。ワイマール憲法が成立し、第一回の選挙による政権は、ワイマール連合（社会民主党・中央党・民主党）が多数を取ることの出来ない『共和主義者なき共和国』として出発させてしまったドイツ国民のもとにあるということであった史実。そして、1921年8月に、休戦条約の代表として署名をした中央党のエルツベルガーが暗殺され、1922年6月には外相ラーテナウが右翼青年に暗殺されるという事件を、マンはその事実の奥にある不安をじっと見すえつつこの演説を行なっている。

……よき古き時代に愚痴ばい誠実さを捧げる老人のように、片意地に共和国に対して考えられるかぎりの難儀を与えるのも、臆病というものでしょう！もう一度質問すると、内的な真実を否定するのは理性あり、名誉ある態度でしょうか？共和国はそのもっとも悪意ある敵対者から見ても内的な真実であり、共和国の死を目的とする狂気の行動のうちにもなお共和国はその姿を現わします。そしてちょうど今、共和国のもっとも洗練された従僕の繊細、賢明な頭を打ち砕いた不吉な若者たちは、おそらく考えてもみななかったでしょうが、大臣を射殺することはいちじるしく共和主義的な行動様式なのであります。……(11)

上記引用の下線部分は、トーマス・マンは明らかに、彼にとってきわめて衝激的な事件、外相・ラーテナウの右翼青年による暗殺をさし示していると思われる。そして、マンがこの講演で主張したい主たるテーマを、再び引用すれば、次のことにつきるといえましよう。

…私の意図は、これをはっきり申しあげれば、必要なかぎり諸君を共和国のために獲得することであり、デモクラシーと呼ばれているもののために獲得することです。……(12)

『ドイツ共和国について』は、『ディ・ノイエ・ルントシャウ』誌のゲールハルト・ハウプトマン特集号の為に書かれたものを、講演されたもので、ハウプトマンを讃える為のものとしているものである。彼の『織匠』等は特に社会的、民主主義的傾向をもった作品としてつとに有名であったはずであるが、このマンの講演は、「ワイマール共和国」支持の立ちばでなされ始めると、このベルリンのベートベンホールの聴衆は、足音を何度もさせて、その不満を現わしている。

再び、1930年10月17日同じベートベンホールで行なわれた講演“Deutsche Ausprache-Ein Appell an die Vernunft”『ドイツの呼びかけ』—『理性に訴える』副題の『理性に訴える』の方が今では主題として訳されている方が多い。この講演は、ドイツの政治情勢は、前回の講演とは逆の方向に増々、右傾化し、ドイツ・ワイマール共和国崩壊への道をたどっている危機意識から、

文学的講演というよりは、より政治的講演になっていることは、次に引用する抜粋によっても、その理解をえられるであろう。

……聴衆のみなさん、国家選挙の成行きは純粹に経済的には説明できません。……ドイツ民族は生来の素質から言えば急進的ではありません。そしてもし、少なくとも現在の瞬時露呈した程度の急進化は経済的不振の結果にすぎないと言うなら、それによって説明できるのはせいぜい共産主義の伸張ぐらいのところであって、大声で喚き立てながらきわめて効果的戰闘的に国家理念を社会理念に結びつけているらしい政党に大衆が流れこんでいる事実となると、説明がつかずまい。……9月14日の結果を誇りに思ったり、外国に対してこれを自慢したりするのは、賢明でもなければ、品のある態度でもないとしても、これが外に向って注意、嵐の合図、警告としての効果を生むのを黙視することはかまいますまい。……(13)

9月14日の結果とは、1930年9月14日のワイマール共和国の国政選挙——別表1——をさし示している。

……ベルリンで最悪の事態が現実のものとなった。9月15日午前2時半ごろ、ラジオが総選挙の結果を放送すると、ちょっとしたパニックが起きた。ナチ党は、ドイツ憲政史上、空前の「地すべりの勝利」を収めた。ナチ党は、たったひとつ飛びで107議席、630万票を獲得して、ドイツ2番目の政党となった。もっと悪いことには、中道政党と穏健右派の大部分が敗北した。……総理府長官のビュンダーは「まさに恐るべき結果」とメモし、外交官のハリー・グラーフ・ケスラーは「ドイツの暗黒の日」と日記に記した。……(14)

次に、そのナチス党の本質を分析してみせて、その非合理性を、反デモクラシーの危険な姿を分析して、ドイツ人に理性をとりもどすようにと訴える。

……聴衆のみなさん、これら外交、内政上の苦悩の原因こそ、経済的窮状と並んでドイツ民族にセンセーショナルな選挙結果を生み出させた原因であることを認識するのに、あまり心理学的な技術は必要ありません。ドイツ民族は、どぎつく貼り出された選挙公約、いわゆる国家社会主義党の選挙公約を利用して、己れの感情を表現したのです。……つまり生命概念を思考の中心に据える非合理主義的反動であって、無意識的なもの、ダイナミックなもの、暗く創造的なものなど、もっぱら生命を賦与する力を看板にかかげ、単に知的なものとしか理解されない精神などは生命を殺すという理由で拒否し、この精神に代えて、魂の暗部、母性的冥府的なもの、神聖にして多産な下界を、生命の真実として称えたものです。その本質からすれば放縦に墮し、バツカス的逸脱を示す傾向のあるこの自然宗教的性格のうち多くの要素が当代のネオ国粹主義の中に入りこんでいる……自由の理念から逃げ出した人類の、常軌を逸した精神常態に対応するのが、グロ

テスクな型の政治で、救世軍風の行動、大衆的発作、露天風の喧騒、讃美の叫びなどをとめない、托鉢僧のように、みんなが泡を吹きだすまで単調なスローガンを繰返します。狂信が救済原理となり、感激が癡癡性の恍惚となり、政治が第三帝国あるいはプロレタリア的終末論の大衆の阿片となって、理性は面をおおいます。……(15)

トーマス・マンは、私達が、近代・現代史として評価の確立した歴史観を、すでにその時代の中にあっても、ヒトラーのひきいるナチス党とそれにおどらされていく、ドイツの大衆の姿を、実是的確にとらえていると思う。そしてその時、—1930年10月—のドイツ市民がいかなる政治的立場に立つかを、マンは次のように分析している。まずは、カトリック教会が、ナチズムに反対する立場にあり、ヨーロッパに広がりつつある、異常な国粹主義に反対な立場を堅持しているのを賛美しつつ、社会主義を、ナチスは「マルクス主義的」と呼んで、大衆を社会民主党から引きはなしていく狡猾なやり方を指摘し、第一次大戦終了時に国を救った側は、どちらなのかを、説きあかし、民主主義的国家形態を堅守すべきを説いている。そしてこの分析と、その理解は、現代でも今なお重要なデモクラシーの形態を、トーマス・マンが、どんなに正しく理解しているか。そして、1930年9月14日の選挙結果に、強い危機感をもったかは、第一次大戦中の彼の政治認識と比較すれば、大きな変化をとげていることは一目瞭然であろう。そのことは同時に、ナチスから見れば、ノーベル文学賞を授与されたばかりの、ドイツ文学の名誉者といえども、危険な存在として、注目し、いつの日にか、反撃をし、黙らせてしまおうとねらいをつけるのは当然のなり行きといえないだろうか。この講演会は、実際に黒い魔手が、同じく文学をなりわいとする者にそれをさせている。1922年にミュンヘンを追われるまで、マン家の近くで、住居を持ち、親しく交流を持った、有名な音楽家、指揮者である、ブルーノ・ワルターが、『主題と変奏』という自伝的回顧録の中で、その時の様子を記述しているので、それを引用して、この稿をしめくりたいと思う。

……私は1922年の末にミュンヘン歌劇場を去ったが、マン家の人びとはその後もときおり再会した。増大するナチズムに対する彼の怒りは、その間にますます鋭く表現されるようになっていた。とくに、1930年に彼がベルリンでした講演（『ドイツの訴え、理性へのアピール』）のことは、はっきりと覚えている。聴衆のあいだに張りこんだナチ党員の野次や怒号によって、威嚇的な妨害を受けたのであった——デモンストレーションの指揮をとっていたのは、大きな黒眼鏡で顔を半分かくした《詩人》アルノルト・ブロンネンであった——そのためにマンは、かき消されがちな論述をアッチェレランドで終わらせ、ホールを去らなければならなかった。——まったくほっとしたのは、彼の出版者S・フィツシャーの夫人だった。彼女は最前列の中央に坐って、ふるえながら「できるだけ早く終わりになさって」と、くりかえしマンに囁きかけていたのであった。彼が演壇をおりるや、妻と私は危険な聴衆との接触から彼を守るためにいそいで駆けつけ、

彼とその家族をベートベン・ホールの楽屋から、私のよく知っている連絡通路を通して、隣接するフィルハーモニーの建物へ導き、そこの暗いホールを手さぐりで抜けて、ケーテン通りに面した出口にたどりついた。私は不吉な予感から、そこの中庭に車を待たせてあったのだが、このおかげで私たちは身の安全を守ることができた。——(16)

ワルターが、記述したように、デモクラシーを説き、ワイマール共和国の支持を説いた側が、講演を途中で、中止せざるをえない、ベートベン・ホールという小さな社会は、その外にある大きな政治情勢そのものであって、共和国の崩壊へとまわり始めた歯車は確実に前進をし、ついに1933年1月30日、ヒトラー内閣の成立によって、完全な共和国側の敗北となる。

注

- (1) ein Prospekt: Information Für den Besucher Buddenbrookhaus Heinrich-und-Thomas-Mann-Zentrum.
- (2) トーマス・マン作 望月市恵訳 【ブッデンブローク家の人びと 上】 S.164 岩波文庫
- (3) トーマス・マン著 高橋義孝訳 【トーマス・マン全集 III 魔の山】 S.13~S.14 新潮社
- (4) クラウス・マン著 渋谷寿一訳 【反抗と亡命——転回点2】 S.178~S.179 晶文社
- (5) トーマス・マン著 【トーマス・マン全集 別巻】 S.572 新潮社 ——“Thomas Mann Eine Chronik seines Lebens” Haus Bürgin und Hans-Otto Mayer 1965の訳
- (6) Klaus Mann Herausgegeben von Joachim Heimmansberg, Peter Laemmle und Wilfried F.Schoeller Tagebücher 1931 bis 1933 edition spangenberg, München, 1989 S.122~S.124
- (7) トーマス・マン著 岩田行一、浜川祥枝、森川俊夫訳 【トーマス・マン日記 1933~1934】 紀伊國屋書店 S.3
- (8) Thomas Mann Tagebücher 1933~1934 S.Fischer S.3
- (9) トーマス・マン著 浜川祥枝訳 【トーマス・マン全集XII 書簡】 新潮社 S.246~S.247
- (10) トーマス・マン著 森川俊夫訳 【トーマス・マン全集X ドイツ共和国について】 新潮社 S.446~S.497
- (11) ebd. S.499
- (12) ebd. S.495
- (13) ebd. 【理性に訴える】 森川俊夫訳 S.524~S.525
- (14) ハイイツ・ヘーネ著 五十嵐智友訳 【ヒトラー独裁への道】 朝日新聞社 S.178~S.179
- (15) トーマス・マン著 森川俊夫訳 【トーマス・マン全集 理性に訴える】 新潮社 S.529
- (16) ブルーノ・ワルター著 内垣啓一、渡辺 健沢 【主題と変奏 ブルーノ・ワルター回想録】 白水社 S.287

参考書： Haus Hofmann “Thomas Mann und Davos, Rund um Den Zauberberg” Calnda Verlag

〈注〉 Haus Bürgin und Haus-Otto Mayer “Thomas Mann Eine Chronik seines Lebens” 1965 Fischer Verlag を森川俊夫氏が訳したものである。又この書について、村田経和氏が書いた「トーマス・マン」清水書院発行によると、上記のトーマス・マン年譜とトーマス・マンの日記とはくいちがう個所が時々あると書いているのを参考にした。

別表1 ハイイツ・ヘーネ著 五十嵐智友訳 【ヒトラー独裁への道】朝日新聞社S.440~S.441

田中 博：トーマス・マンとヘルマン・ヘッセのゆかりの地を訪ねて VII

ワイマル共和国の国会議院選挙の推移（得票数／得票率）

選挙年月日 政党名	制憲国民 議会選挙 1919・1・19	第1回 1920・6・6	第2回 1924・5・4	第3回 1924・12・7	第4回 1928・5・20	第5回 1930・9・14	第6回 1932・7・31	第7回 1932・11・6	第8回 1933・3・5
国家社会主義ドイツ 労働者党 (ナチ党=NSDAP)	—	—	—	—	809,771票 (2.6%)	6,406,924票 (18.3%)	13,779,111票 (37.4%)	11,737,391票 (33.1%)	17,277,185票 (43.9%)
ドイツ国家人民党 (DNVP)	3,121,479票 (10.3%)	4,249,100票 (15.1%)	5,696,368票 (19.5%)	6,205,324票 (20.5%)	4,380,029票 (14.2%)	2,457,572票 (7.0%)	2,186,661票 (5.9%)	3,131,657票 (8.9%)	3,136,752票 (8.0%)
人民党 (DVP)	1,345,638票 (4.4%)	3,919,446票 (13.9%)	2,694,317票 (9.2%)	3,049,215票 (10.1%)	2,678,207票 (8.7%)	1,577,411票 (4.5%)	436,014票 (1.2%)	661,794票 (1.9%)	432,312票 (1.1%)
中央党およびバイ エルン人民党 (Zentrum,BVP)	—	5,018,345票 (17.8%)	4,861,027票 (16.6%)	5,250,169票 (17.4%)	4,656,445票 (15.2%)	5,185,716票 (14.8%)	5,792,507票 (15.7%)	5,326,583票 (15.0%)	5,498,457票 (13.9%)
民主党 (DDP,1930年以降は ドイツ国家党=DSP)	5,641,825票 (18.5%)	2,333,741票 (8.3%)	1,655,049票 (5.7%)	1,917,764票 (6.3%)	1,504,148票 (4.9%)	1,322,028票 (3.8%)	373,338票 (1.0%)	339,613票 (1.0%)	334,232票 (0.9%)
社会民主党 (SPD)	11,509,048票 (37.9%)	6,104,398票 (21.7%)	6,008,713票 (20.5%)	7,880,963票 (26.0%)	9,151,059票 (29.8%)	8,575,699票 (24.5%)	7,959,712票 (21.6%)	7,250,752票 (20.4%)	7,181,633票 (18.3%)
独立社会民主党 (USPD)	2,317,290票 (7.6%)	5,046,813票 (17.9%)	235,141票 (0.8%)	98,809票 (0.3%)	20,685票 (0.1%)	11,651票 (0.0%)	—	—	—
共産党 (KPD)	—	589,454票 (2.1%)	3,693,139票 (12.6%)	2,708,345票 (9.0%)	3,263,354票 (10.6%)	4,590,453票 (13.1%)	5,297,068票 (14.3%)	5,980,540票 (16.9%)	4,848,079票 (12.3%)
その他	6,465,064票	935,035票	4,437,432票	3,173,217票	5,084,445票	4,830,352票	1,0057,943票	1,043,437票	634,665票
投票率	89.6%	79.2%	77.4%	78.8%	75.5%	82.0%	84.1%	80.6%	99.0%